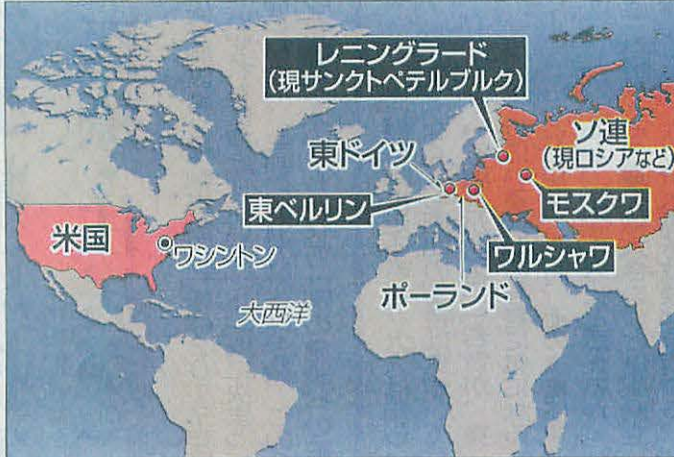


核攻撃立案 住民も標的

2015.12.26

●…1956年当時の米核攻撃計画の主な対象都市



米軍の核標的をこれほど包括的に記載した文書が明らかになるのは初めてとみられる。同公文書館は、住民を軍事目標としたことについて「国際規範に違反する内容だ」としている。

計画は研

潜在目標は1200都市以上

【ワシントン共同】米国が東西冷戦中の1950年代にソ連との核戦争を想定し「体系的な破壊」を目指してモスクワ、東ベルリン（当時）などの都市に核爆弾を投下する計画を立案、住民も主要な攻撃目標としていたことが24日、機密解除された米空軍の文書で分かった。潜在的な攻撃対象は中国を含め1200都市を超えていた。

米ジョージ・ワシントン大のシンクタンク、国家安全保障公文書館が入手した。文書は1956年作成。3年

後の59年の段階で想定される軍備を前提にした内容になっている。具体的に詳細な標的リストも含まれており、

ため、広島に投下された原爆の約4千発分に相当する60発の原爆開発も提言していた。

象に指定されていた。攻撃目標として「住民」の記載もあった。

米軍の最大の狙いはソ連空軍の攻撃能力の弱体化だったが、軍事施設の多くは人口密集地付近に位置しており、施設を狙った攻撃でも多数の市民が犠牲になることを辞さない方針だったとみられる。各都市の攻撃には、必要量を上回る爆弾の使用が想定されており、高濃度の放射性物質による広範囲の被害が予想されていた。

文書は、ソ連の勢力圏にある大都市などを標的として列挙。最優先とされていたのはモスクワとレニングラード（現サンクトペテルブルク）で、それぞれ重要施設などで150カ所前後が核攻撃対

象に指定されていた。攻撃目標として「住民」の記載もあった。

米軍の最大の狙いはソ連空軍の攻撃能力の弱体化だったが、軍事施設の多くは人口密集地付近に位置しており、施設を狙った攻撃でも多数の市民が犠牲になることを辞さない方針だったとみられる。各都市の攻撃には、必要量を上